

入野・八坂神社の例大祭

添田 悟郎

The regular festival of Ino - Yasaka Jinja

Goro Soeda

神奈川県平塚市入野に鎮座する八坂神社では毎年4月第1日曜日に例大祭が執り行われ、子供神輿1基と囃子の山車2台が入野地区を巡行する。入野の八坂神社神輿はもともと文化9年(1812年)に再興された西岡田村(現寒川町岡田)の八坂神社の神輿で、明治29年(1896年)頃に入野に売却され、平塚市で現存する最古の神輿である。現在は老朽化が激しく境内のみの渡御ではあるが、今なお現役で活躍している神輿である。また、入野の囃子は昔から上手いといわれ、“間物(まもの)”と呼ばれる珍しい組曲が伝承されている。以下に平成27年(2015年)4月5日に行われた例大祭と、前日の宵宮の様子を紹介する。

Yasaka Jinja located in Ino, Hiratsuka-shi, Kanagawa-ken holds its annual festival on the first Sunday in April; one children's portable shrine and two floats for matsuri-bayashi parade through Ino area. Yasaka Jinja Mikoshi was reconstructed in 1812 (Bunka 9) and the owner was originally Yasaka Jinja of Nishiokada-mura (present Okada, Samukawa-machi). The Mikoshi was sold to Ino in about 1896 (Meiji 29) and it is the oldest portable shrine in Hiratsuka-shi now. Eventhough Ino's Mikoshi becomes superannuated, it is still carried even today. Ino's hayashi have had a good reputation for its skillfulness. Its Hue was lost. Nevertheless, the rare musics called "Mamono" are still transmitted. In this report, I introduce the festival in 5th April 2015 and its previous day "Yoimiya".

1. 八坂神社

1-1. 八坂神社の歴史

「八坂神社」は入野の鎮守で、祭神は「建速須佐之男命」である。創建年代は不詳だが、寛文5年(1665年)の検地帳に「宮面(免)」があることから、少なくともこのころまでには成立していたものと考えられる。天保12年(1841年)完成の『新編相模国風土記稿』によると「牛頭天王社」の名称で、入野村の鎮守(村民持ち)であった。鐘楼には宝永3年(1706年)新造の鐘を掛け、末社には「天神」・「山王」・「蔵王」が記載されている。入野の神社に関する記載の中にはこの他に、成願寺持ちの「神明社」と村民持ちの「山王社」、松林寺の「稲荷社」と「天神社」、成願寺の「稲荷社」、福田寺の「白山社」の名がみられる。



図 1-1. 鳥居と参道



図 1-2. 社殿

明治3年(1870年)の村明細帳には「神社壱ヶ所 八坂社 社地社外共高三石三斗 此反別三反歩」とあり、明治時代初期に八坂神社と改称し今日に至っている。明治41年(1908年)に御神体と

神輿以外を火災で失ったが、大正15年(1926年)に社殿を再建した。

1-2. 境内社と道祖神

境内の隅に木製の祠とコンクリート製の祠があり、末社の天神・山王・蔵王がこれに該当する可能性がある。なお、神明社と山王社の所在は確認できていない。入野には48基の石造物があるが、その大部分が寺院と神社に集約されている。これは昭和40年代に行われた入野の中央部を貫く道路の拡張工事に伴い、路傍の石造物が移設されたためである。

かつては、道祖神が西町を除く田中町・東町・川崎町・仲町・向町の町内ごとに入野の辻辻(十字路ごと)に立てられ、1月14日には小屋を立ててダンゴヤキを行っていたが、道路拡張工事により昭和45年(1970年)頃に全ての道祖神が八坂神社の境内に寄せられた。



図 1-3. 境内社



図 1-4. 道祖神

2. 水神様

水神橋袂の天王道路(入野 508)傍らに「水神之塔」と彫られた石の祠があり、この場所は集落でいう西町にあたる。金田地区は金目川の恩恵に浴しながらも、その水害防止に苦勞した歴史がある。水は稲作を中心とした農業にとって必要不可欠なものであり、この水神は大切に祀られてきた。かつては八坂神社の祭礼において神輿が天王道を通してこの地まで渡御し、神主に祝詞をあげてもらっていたが、現在は神輿が境内を出ることはなく、神主が祝詞をあげるのみである。



図 2-1. 水神之塔



図 2-2. 石の祠

3. 入野地区の変遷

『風土記稿』には入野村の小名として「東町」・「西町」・「向町」・「田中町」・「四ツ谷」・「入野飯島」が記載されているが、現在は「田中町」・「東町」・「川崎町」・「仲町」・「向町」・「西町」の町内に区分されている。このうち西町はかつて鈴川沿いにあった字「根下」の家々が水害に遭い、宝永噴火の翌年宝永 5 年(1708 年)に移転して形成された町内といわれている。入野には各町内で祀っていた道祖神が八坂神社に集められているが、西町には道祖神がなく、正月 14 日のダンゴヤキのときには西町の家々は川崎町などの元屋敷の町内のダンゴヤキに分散して参加していた。なお、四ツ谷は現在の西町の一部になっており、入野飯島は金目川右岸の数軒を指し、町内区分では西町に属している。

古道については『風土記稿』に「伊勢原道(幅八尺)、曾屋道(幅二尺)」とあり、伊勢原道は地区内の主要道で長持から寺田縄へ南北に通じ、入野では地藏道や大山大道と呼ばれた。地藏道とはこの道端に地藏があったことに由来し、地藏は道路拡張工事に伴い昭和 45 年(1970 年)頃に福田寺へ移された。曾屋道は現在の主要地方道平塚秦野線である。また、水神橋から東へ伸び、八坂神社の鳥居前を通る道を天王道といった。

金目川は『風土記稿』に「昔は村の中程を、斜に疎通し、巽方にて鈴川に合せしが、屢水溢せしを以て宝永三年命ありて今の如く掘替れり」とあるように、元禄 16 年(1703 年)の地震の影響で河床が高くなった金目川を、宝永 3 年(1706 年)に筋変え工事を実施してほぼ現在の金目川の流路になった。筋変え前の金目川は現在の水神橋付近から天王道にほぼ沿って東南東へ流れ、成願寺の北側から東へ長持との境付近を流れていた。かつては大山大道(地藏道)と天王道が交差する所にケヤキの大木があり、これは金目川の舟を繋いでおく木であったといわれている。なお、宝永噴火の宝永 4 年(1707 年)による降砂の堆積でさらに水が溜まりやすくなり、川崎町から西町への移転がなされたと考えられる。

4. 祭礼の歴史

『風土記稿』によると旧暦の 6 月 14 日が例祭日と記され、金目川で神輿の渡御が行われていたという。例祭日はその後 4 月 2 日になったが、雨の日や寒い日が多いので神輿を担ぐのに不都合だった為、戦前の昭和 15 年(1940 年)頃に 4 月 20 日に変更した。しかし、農作業(特に苗作り)の関係で元の 4 月 2 日に戻したという。現在は 4 月第 1 日曜日となっている。

かつて、祭礼の前日には入野の氏子全員によって神社の掃除や幟立てをし、奉納神楽や芝居を行う舞台を作り、太鼓を叩く櫓も拵えた。祭礼当日には三之宮比々多神社から神主がやってきて、祝詞をあげて式典を行った。夜になると茅ヶ崎の円蔵から神楽師を呼んで神楽を奉納した。芝居は 10 年に 1 回ぐらいの割合で行ったという。こうした余興については、旅芸人がまわってくる他の村々から何処の芸人がよいかを聞いて頼んできた。各家では祭りの当日にオコワと煮べを作り、オコワ 1 重、煮べ 1 重をコウジブタにのせて奉納したという。コウジブタというのは麵をねかせる専用の木箱で、三尺一寸五分×九寸五分×三寸五分の長方形のものである。昔は各家で 10 枚ほどは持っていたという。

祭りの翌日をハチハライといい、神楽舞台や櫓などを解体し、幟を倒して掃除をした。こられの後片付けを終えてから、神社の境内で一杯飲んだ。

5. 宵宮

5-1. 準備

ここでは平成 27 年(2015 年)4 月 4 日の宵宮の様子を紹介する。宵宮では午前 9 時頃から準備が行われ、境内の飾り付けのほか、2 台の山車の組立、大神輿と子供神輿の飾り付けなどが行われる。提灯枠は境内入口に十一提灯(提灯 11 個)と自治会館前に奉納花提灯(提灯 35 個)を設置し、参道にも花提灯を取り付けていく。



図 5-1. 大神輿の移動



図 5-2. 山車の組立



図 5-3. 子供神輿の飾り付け



図 5-4. 提灯枠の設置

10 時 30 分頃になると大神輿を軽トラックへ載せて八坂神社の境内から JA 湘南の倉庫前へ移動する。途中で昼食を挟んで振り掛けと飾り付けを行うと、神輿を担いで 15 時 40 分頃にお宮へ戻る。



図 5-5. 振り掛け



図 5-6. 担いでお宮へ移動

5-2. 長持・熊野神社

大神輿がお宮へ戻ると山車に太鼓をセットし、寺田縄の山車と合流して長持の熊野神社へ移動する。寺田縄の例大祭は入野と同じ日で、長持の例大祭は入野の前日の土曜日であることから、最近になり3地区の交流を深めるために集まるようになった。なお、長持には太鼓の山車がないので、境内に櫓を組んで囃子を演奏している。



図 5-7. 寺田縄と合流



図 5-8. 熊野神社に到着



図 5-9. 長持は櫓で演奏



図 5-10. 三地区の交流

5-3. 山車巡回

子供たちは17時頃にお宮へ集合し、自治会館で食事を取り、半纏を着て2台の山車へ乗り込む。2台の山車は18時にお宮を出発して入野地区を巡回し、21時頃にお宮へ戻る。その後も大人の叩き手が山車へ乗り、21時30分頃まで巡回を続ける。



図 5-11. 山車に乗り込む子供達



図 5-12. 境内を出発

5-4. 境内での囃子演奏と大神輿渡御

2台の山車がお宮を出発すると、境内では自治会館前のテント下に太鼓を1カラ設置し、囃子が演奏される。宵宮には他の地区から叩き手が訪れ、他地区との交流の場ともなっている。

19時50分頃になると大神輿の渡御が行われる。最初に社殿前を3周回り、休憩を挟んで鳥居まで渡御する。鳥居前で休憩を取ると社殿まで引き返し、休憩を挟んで再び社殿前で3周回ると

21時30分頃に神輿渡御は終了となった。神輿が休憩している間や、社殿を離れている間は、境内で囃子の演奏が続けられる。



図 5-13. テント下で演奏



図 5-14. 他地区との交流



図 5-15. 鳥居までの渡御



図 5-16. 境内で練る神輿

6. 例大祭

6-1. 準備と式典

ここからは平成27年(2015年)4月5日の例大祭の様子を紹介する。例大祭当日は朝8時頃から準備が始まり、社殿では式典の準備、自治会館では直会の準備が行われる。9時からは関係者が社殿へ集まり、三之宮比々多神社の宮司により例大祭の式典が執り行われる。式典に参加する玉串奉納者は次の通りである。宮総代表、自治会会長、農業土木委員長、巡回責任者、太鼓指導者、神輿責任者、育成会会長。式典終了後は水神橋へ移動し、水神様の祈禱を行う。このときの出席者は比々多神社の宮司と神職1名、農業土木委員、自治会会長、宮総代表となる。



図 6-1. 境内の掃き掃除



図 6-2. 直会の準備



図 6-3. 式典



図 6-4. 修祓

6-2. 子供神輿と山車の巡回

式典が終了すると10時頃に子供神輿1基と囃子の山車2台がお宮を出発し、軽トラックに載せた触れ太鼓を先頭に入野地区を巡回する。子供神輿は小学1~3年生が担ぎ、小学4年生以上が山車へ乗り込んで太鼓を叩く。2台の山車は途中で分かれて移動し、子供神輿が回り切れない道を巡回していく。子供神輿は大人

の補助があるものの終始担いで移動し、一行は計6か所の休憩場所(昼食を含む)を經てお宮へ戻ってくる。



図 6-5. お宮を出発



図 6-6. 今井商店での休憩



図 6-7. ご祝儀のお返し



図 6-8. 水神町へ向かう山車



図 6-9. 田城商会で昼食



図 6-10. 休憩場所の成願寺

巡回を終えた一行が鳥居付近に到着すると、子供神輿は鳥居前で一旦おろされ、担ぎ手が子供たちから母親たちへ交代し、鳥居を潜って参道を進んでいく。宮出しの時は社殿の裏手から境内を出発したが、宮入りは正面に設置された提灯枠の下を潜って境内へ入り、13時40分頃に宮付けとなる。



図 6-11. 鳥居に到着



図 6-12. 参道を進む子供神輿



図 6-13. 子供神輿を迎える囃子



図 6-14. 子供神輿の宮入

6-3. 大神輿渡御

子供神輿が境内へ到着すると、今度は大神輿の渡御が行われ、社殿と鳥居を1往復する。宵宮では社殿の裏手から出入りしたが、大祭では正面の提灯枠を潜って宮出しと宮入りをする。大神輿は参道を通ると桜の枝に接触してしまうため、参道横の道路を担いで移動する。



図 6-15. 一本締めでお発ち



図 6-16. 正面から宮出し



図 6-17. 大神輿渡御



図 6-18. 鳥居前で休憩



図 6-19. 大神輿を迎える囃子



図 6-20. 境内で練る大神輿

大神輿の渡御が終わると、神輿を社殿へ収め、一部片付けが行われる。その後は自治会館で直会が行われるが、太鼓は合間で叩かれ、16時30分頃まで続く。後片付けは例大祭の翌日の月曜日に行われ、後片付け後は鉢払いが行われる。



図 6-21. 宮付け後の三本締め



図 6-22. 大神輿を社殿へ収める



図 6-23. 境内での囃子演奏



図 6-24. 自治会館での直会

7. 神輿

7-1. 八坂神社神輿

入野の八坂神社神輿は「寒川のほうから来たものだ」という伝承があったが、入野にはこれまで記録に残るものは何も伝わってなかった。しかし、平成9年(1997年)の調査により西岡田村(現在の寒川町岡田)の八坂神社(明治42年に神明宮に合祀されて菅谷神社となる)から譲渡された可能性が高くなった。入野の八坂神社神輿と菅谷神社の天保神輿の大きさはほぼ同規模ながら入

野の方がほんのわずかだけ大きい。



図 7-1. 入野の八坂神社神輿



図 7-2. 菅谷神社の天保神輿

重さは量ったことがないので不明とのことであるが、「米三俵分はない」と言伝えられている。米一俵は約 60kg であるから 150～160kg 程度ではないだろうかといわれ、実際の経験からも 8 人いればどうにか担いで歩けるとのことである。大正 15 年(1926 年)の社殿再建のときに神輿の彫刻も若干の補修を行ったといわれ、その彫刻とは四方の欄間にあしらわれた龍・花・獅子鼻などで、大変精緻なものである。その上辺あたりの内側にそれぞれ墨書の銘文があり、神輿内部に記されたこの銘文には以下の文字が確認されている。

奥・・・「文化九年壬申三月吉日再興之 西岡田村」
右側・・・「東都本白銀町三丁目 東叡山御用」
手前・・・「大仏師 森光雲」
左側中央・・・「嘉永」
左側奥・・・「前」

さらに奥の銘文の書かれた板に垂直に組まれた柱には「明治廿七年 七月廿八日」とある。これらの文字からこの神輿は文化 9 年(1812 年)に江戸本白銀町の仏師森光雲によって再興された西岡田村の神輿で、この神輿を明治 27 年(1894 年)7 月に修理したものであると考えられる。台框(だいかまち)の中央にある「格狭間(こうざま)」の形や模様が、寒川神社および菅谷神社に現存する神輿と酷似しているのも、その可能性を高める要素といえる。西岡田村は明治 29 年(1896 年)頃に中郡金田村入野へこの神輿を売却したようである。以上のことから『風土記稿』に記されている神輿は現在の神輿ではなく、さらに古い神輿ということになる。

7-2. 神輿渡御

昭和 30 年(1955 年)頃までは例祭の当日に神輿(「コシ」といった)を担いでいた。村内東端にある八坂神社を出発し、「テンノミチ」と呼ばれる通りを西方へ一直線に進み、金目川にかかる水神橋の少し上流で川に入って禊をした。その後、川の西側を少しまわってから下流で再び川を渡り、村内各所をまわって八坂神社へ戻るというコースをたどった。また、神社を出発した神輿が水神塔がある場所まで渡御し、そこで神主に祝詞をあげてもらったという話もある。そこには竹を 4 本立てて四方に注連が張っており、神輿を安置して神酒をいただいた。そこからムラに戻って各町内を渡御して歩いた。神輿は誰でも担ぐことができたし、コシダイを持つ者も特に決まっていなかった。

戦後は担ぎ手が減少したことや、経済的負担が大きかったことから毎年担ぐことができなくなった。若い衆は担ぎたくてたまら

なかったが、年長者がやむなくそれを押し留めるというせめぎ合いが何年も続いたという。そして神輿自体の老朽化もあいまって、昭和 30 年頃を境に担がなくなった。現在では 4 月の例祭に神輿を装飾して担いでいるが、昔のように境内を出て入野地区を渡御することはない。また、他地区でみられる神輿保存会や神輿愛好会といった神輿を管理する団体は入野では組織されていない。

8. 囃子

かつてはワカイシュももっぱら太鼓をたたいて楽しむ太鼓連中で、青年団から選出された太鼓世話人がいたが、戦争の影響で一時期は中断を余儀なくされた。昭和 45 年(1970 年)頃に各町内の道祖神が八坂神社へ寄せられ、同じ頃に太鼓の復活の話が持ち上がった。それまでは戦後の生活の苦しさを考えて遠慮して、上に立つ人達もむしろ消極的であった。各地でバクチが流行っていたことへの対策の意味もあつて復活の話が決められた。太鼓を地蔵堂に置き、叩くときは鐘つき堂(鐘は供出でなくなった)にくくりつけていた。

昔から入野は「太鼓がうまい」といわれ、近隣へ教えに行ったようである。入野の祭礼では主に「ハヤシ(囃子)」が叩かれ、「バカッパヤシ」または「ブツケ」などと呼んでいる。この他には宮入り時に「ミヤショウデン(宮昇殿)」が叩かれ、「キザミ」を入れて「ハヤシ」へ繋がる。入野ではこれ以外に「間物(まもの)」と呼ばれる組曲が残されており、曲名は「ジショウデン(寺・治昇殿)」・「オオマショウデン(大間昇殿)」・「カングマル(神田丸)」・「トウガク(唐楽)」・「カマクラ(鎌倉)」・「シッコウメ」・「ニンバ」の 7 曲で、間物の後に「キザミ」を入れて「ハヤシ」へ繋ぐ。なお、曲名は口伝で伝わってきているため、括弧内の漢字は予想されるものである。



図 8-1. 山車



図 8-2. 山車



図 8-3. 境内での居囃子



図 8-4. 近年取り入れた笛

以上のように入野ではキザミを含めると計 10 曲が残されており、平塚市の重要文化財に指定されている「田村ばやし」と「前鳥囃子」の様にこれだけの曲が絶えず伝承されていることは非常に珍しいといえる。しかしながら、かつて全曲に入っていたといわれる笛(キザミはなかったようである)は残念ながら途絶えてしまい、現在吹かれている笛は伊勢原市笠窪の譜面を元にしてハヤ

シ(屋台)だけを取り入れている。囃子の構成は締太鼓2と大太鼓1で、入野の囃子は現在「入野太鼓保存会」によって傳承されている。

9. むすび

祭り好きと言えども入野の祭りと聞いて、その特徴を上げることが出来る方は極めて少ないと思われる。事実、田村(平塚市)や一之宮(寒川町)のように立派な山車があるわけでもなく、田村ばやしや前鳥囃子のように入野の囃子が平塚市の重要文化財に指定されているわけでもない。また、神輿に関しては子供神輿が巡行するだけで、大人の神輿は境内を往復する程度の渡御に留まっている。

しかしながら、入野には田村ばやしや前鳥囃子に勝るとも劣らない囃子が傳承されており、笛が現存していれば間違いなく重要文化財に値する囃子だと確信している。入野の囃子は周囲の影響をあまり受けていない、入野らしさが残されている囃子である。テンポやバチ数、そしてその独特の間は大変心地よく感じられ、昔から太鼓が上手いと評判であったことも十分納得できるものである。もし夢が叶うならば、笛の入った“間物”を是非聴いてみたい。

入野の八坂神社神輿は町内を渡御しないこともあり、その存在は広く知られていないが、平塚市で現存する最古の神輿である。その歴史についてはまだまだ謎が多く残されているが、菅谷神社(寒川町)の天保神輿に関係している可能性も秘めている。今後の調査の進展に期待するとともに、老朽化という不安材料はあるが、この貴重な神輿が後世に引き継がれることを祈願したい。

○参考文献

1. 『寒川その昔を語る 第九集』 寒川町郷土研究会 (1986)
2. 『平塚市民俗調査報告 4-金目・金田-』 平塚市博物館 (1984)
3. 『平塚市史 12 別編 民俗』 平塚市博物館史編さん係 (1993)
4. 『寒川町史研究 第11号』 寒川町史編集委員会 (1998)
5. 『平塚市文化財調査報告書 第34集』
平塚市教育委員会 (2003)
6. 『平塚のお祭り -その伝統と創造-』 平塚市博物館 (2005)
7. 『平塚の石仏 改訂版 8 金田地区編』
石仏を調べる会 (2013)

作成 : 2016年1月